



あぶ小だより

須賀川市立阿武隈小学校
第44号
令和2年11月13日
☎ 76-5135

校内ばしょう賞 十月

特選 五年 小野寺朱伽

きのうまで

大人のコスモス

腰曲げる

入賞 一年 さとう ここ

どんぐりがきからころころこちきた

一年 いけだ ゆうり

あかとんぼもみじのやまとにているな

二年 あんどう しょう

はださむいそらでかけっこあかとんぼ

二年 おかべ とうき

秋だよとおじぎしているねこじやらし

二年 わたなべ うた

くりひろいあきのたからをみつけるぞ

三年 大沼 あい

くもり空いねかり急ぐおじいちゃん

三年 西間木 陽愛

ハロウィンだみんななかそうだがだれ

四年 井上 真悠

木の下でコツンとやられたどんぐりに

四年 池田 陽世里

かれた葉が思い出のせてちつていく

四年 折笠 稚娃

夕空に集まるとんぼ赤くそめ

五年 水野 琉希愛

カーテンをあけたらまどに赤とんぼ

六年 佐久間 美月

夕空と色おそろいにもみじの葉

六年 佐藤 優樹

落ち葉から空を見上げるダンゴムシ

六年 佐藤 天音

登下校ふわりと香るきんもくせい

十月から1年生の俳句も登場しました。みずみずしい作品がいっぱいです。これからは、秋から冬へ向かいます。季節感のある句がさらに投句されることでしょう。

表彰 ～おめでとうございます～

< 県書道連盟展 >

福島民報社賞	6年	本田	琳子
朝日新聞福島総局長	3年	柴原	菜乃
福島テレビ賞	2年	小山田	紗衣

< 第66回青少年読書感想文コンクール
県審査会 >

特選	1年	渡辺	暖真
準特選	3年	橋本	莉々

運動会、秋晴れのもと盛会裡に終了



順延となった運動会でしたが、6年生の鼓笛演奏を皮切りに子どもたちの元気な姿を見ることができました。

保護者の皆様にも澁刺とした子どもたちの競技を見ることができて、運動会ができてよかったという思いを新たにしました。

さすが、6年生の鼓笛はすばらしかったですね。下級生の皆さんがじっと目をこらし、耳を立てて静かに見つめる様子からもすばらしさが伝わってきました。

鼓笛演奏が阿武隈小の曇り空を吹き飛ばしてくれました。

保護者の皆様には、立ち見という不便をおかけしました。精一杯走る姿や張り切って活動する様子を見ていただけましたか。半日という短い時間でしたが、皆様と同じ時間を共有できたことをうれしく思っています。これからもよろしくお願いいたします。

あっという間の11月になりそうです。今は、体育の時間に「長く走る」(持久走)の学習をしています。今年は、保護者への案内をいたしません。ご理解のほどをよろしくお願いいたします。教科学習も2学期後半、がんばらせたいと思います。

学校の活動の様子はホームページでもご覧いただけます

ある教育誌からの抜粋です。コロナ禍にあって、「コロナ」という言葉が人々の心を直撃しています。そんな方々を私たちは応援していかなければと感じます。「目に見える現実に向き合い、直視し、メディアでなく自分の言葉で、考え判断し生きる意味を考えること」を大切にしたいと思います。

メンタルヘルス

第26回

自分の言葉で生きる 意味を考える

ウエルリンク株式会社 代表取締役社長

宮下 研一

東京大学文学部在学中、木村尚三郎教授に師事。PHP 研究所にて松下幸之助、本田宗一郎、山本七平等の著書を編集。2000年にウエルリンク株式会社設立。日本産業精神保健学会会員、日本産業衛生学会会員。著書に「IKEIRETSU」(全米出版社協会最優秀賞)。

美しい言葉を書く人の心が美しいとは限らないし、正論を書く人の行動が正しいとも限らない。言葉を書き受けることは危うい行為なのかもしれない。そんなことは普段ならば当たり前のことなのだが、今回のコロナウィルス騒動におけるマスメディアの報道振りとその葉の持つ恐ろしさ、と言うよりも言葉と実態の関係、一体言葉とは何なのだろうと考え込む日が増えました。私自身、人間は言葉によって傷つくこともあれば、

言葉が心を癒してくれることがある事実を、仕事を通して毎日のように目にしているの、どうしても言葉に敏感になっているからかも知れません。この問題には言葉と深く関係しているのです。

全国に緊急事態宣言が出され、外出せず自粛し、三密を避け、アラート(なぜか英語)が出れば再び自粛し、その間に居酒屋やレストラン、中小企業どころか有名大企業まで倒産し解雇者も増大...と、年初には予想もできなかった事態が日本及び日本人を襲っています。経済は縮小し大不況。この恐ろしいほどの現実に向き合いつつ、あら不思議、実際の感染者にも、重篤な方にも、死者にも出会ったことが無い人が大半でありましょう。

コロナウィルスに感染して発症し、さらに重症化して亡くなる方は、日本では欧米に比べて非常に少ないことが分かっています。それは数字に示された厳然たる事実です。ところが、ウィルスの遺伝子のかけらを増幅して検査するPCR検査で「陽性者」が出ると、マスコミはそれを「感染者」として全国民に発表する。昨日は何人、今日は何人と、全国にウィルスが蔓延し、日本列島がコロナウィルスで汚染されてしまったかのようです。罹患しているか否かも分からない人も「感染者」とされ、近づいても触れてもなら

ぬことになる。検査の「陽性」と実際の「感染」の違いも区別できずに、日本では目に見えぬ「感染」という言葉、あえて言えばいるかどうかとも分からぬ妖怪に全国民が恐れ慄いている。実際、感染しても発症したり重篤になつたりするわけではないのに、死ぬかも知れないと思う人がかなりいるらしい。言葉がところを直撃している。その結果、「感染」という言葉、「陽性」という言葉そのものに雁字搦めになつて、傷つき、動くこともできない人が多数出現して、耳とところを閉ざしている。

一体、今起きている事態は何なのか。言葉だけが踊っている。言葉に人間が殺されかけている。「感染者」は知りませんが、会社が危うくなり首を切られた人、職場に行けなくなり退職して無職になった人は知っています。親の仕事が無くなり進路変更を余儀なくされた子どもは知っています。すべてマスメディアが無責任に流す「感染」という言葉が発端です。言葉は人を癒し、勇気づける。しかし、言葉にこころを冒され、殺されてしまうこともある。たつた今必要なことは、目に見える現実に向き合い、直視し、メディアでなく自分の言葉で考え判断し、自分の言葉で生きる意味を考えることではないでしょうか。